

第4回令和7年度エコツーリズム推進基本方針に関する検討会 議事概要

1. 日時・場所

日時：令和8年2月16日（月）15：00～17：00

場所：ビジョンセンター新橋1602号室及びオンライン開催（Teamsを使用）

2. 出席者

〈委員〉

江崎委員、海津委員、楠部委員、新谷委員、寺崎委員（座長）、府川委員、
山崎委員、山下委員

〈関係省庁〉

国土交通省観光庁観光地域振興部 矢吹観光資源課長

農林水産省農村振興局農村政策部都市農村交流課 東農泊推進室長（廣川課長代理）

文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 河村課長補佐（中園課長代理）

環境省 成田大臣官房審議官

環境省自然環境局 長田国立公園課長

環境省自然環境局国立公園課 立田国立公園利用推進室長

〈オブザーバー〉

一般社団法人日本エコツーリズム協会 水谷事務局長、高野事務局員

3. 議題

- (1) エコツーリズム推進基本方針見直し案について
- (2) その他

4. 概要

議題（1）について意見交換を行った概要については以下のとおり。

委員からのご意見をふまえ事務局において改めて検討した後、寺崎座長と事務局で調整したうえで見直し最終案とすることの了承を得た。

(1) エコツーリズム推進基本方針見直し案について

○基本方針制定当時の検討会は委員も学識者が主だったが、今回の見直しでは現場の話や具体的な内容に関する議論が中心となり良かった。最終的な見直し案についても良いものができたと思う。

○モニタリングや事務局のあり方なども反映され、良い内容になった。オーバーツーリズム

ムを巡る様々な議論を行ったが、今回の見直しでは、エコツーリズムに取り組むことで地方誘客に寄与できるという方向性なのだろう。全体構想認定数等の微修正の後、最終確定で良いのではないか。

- 参考資料2の17ページ「戦略的情報発信等」について、パブリックコメントでは「戦略」という言葉を改めるべきとの意見があった。全体を通してここだけに戦略という言葉が使われていることについては、違和感がある。地域において進んで情報発信を行っていくという意味を込めて、「積極的」と置き換えてはどうか。
- 「積極的」と「戦略的」とではニュアンスが変わるのではないか。単なるPRではなく、エコツーリズムとして大事な物を見せ、大事なものと分かってもらうという意味合いではないかと思う。
- エコツーリズムのあり方や全体構想を作ることにに関する情報発信ということであれば、「積極的」な広報で良いのではないか。
- 広報や情報発信は行政が苦手とする部分であり、特定の箇所に旅行者が集中するオーバーツーリズムに関しては、旅行者へ情報が正しく、広く、狙うところに伝わるのが重要だと現場では感じている。
⇒（環境省）「積極的」では意味合いが異なってしまう。ここだけ「戦略的」となっているのは、策定当初からそうになっており、とりわけ情報発信については戦略的である必要があるということ。
⇒（座長）事務局で預からせて頂くこととする。
- 参考資料2の25ページ「3 エコツーリズムの実施の方法」の項目は、エコツーリズムではなくエコツアーのことを述べているのではないか。混乱してしまっていて啓発していくうえで支障があるのではないか。
⇒（環境省）エコツーリズムという用語については、エコツーリズム推進法第2条に定義があり、当該項目では法律上のエコツーリズムについて述べている。法律上の文言と一般的な使われ方の役割分担等については、解説本等で補足したい。
- 一般の方が読みやすいよう、単語の整理をすべきではないか。参考資料として付け加えてはどうか。
- エコツーリズムを実施する際、エコツアーもそうでない形もある。例えば宿泊の中でエコツーリズムを体感することや、ガイドマップを用いて自分で楽しむこともある。実施方法が色々あるためこのような表現にしているのではないか。
- 「エコツーリズムの実施」というと、観光旅行者へのエコツアーの提供だけでなく、地域づくり全般と捉えられるが、この部分の記載はいわゆるエコツアーの文脈が多い。
- エコツーリズム推進法の中でエコツーリズムの定義があるが、エコツアーの定義を通してその基盤となるエコツーリズムとは何かを伝えるものになっている。混乱を招か

ないよう、基本方針の中で少し言葉を加えるような工夫が必要ではないか。

- 参考資料2の26ページ「ルール」では、「エコツーリズムにおけるルールとしては…」と始まり、末尾では「エコツアーの実現につながり…」となっており、言葉の揺れや矛盾が生じていると考える。用語の使い方を明確にした方が良い。
- エコツーリズムの取組が始まった当初、エコツーリズムの考え方を簡単なメッセージで広めるため、ガイダンスとルールということ伝えていった経緯がある。
- 「エコツーリズムの実施の方法」を「エコツーリズムの展開の方法」に言い換えることで、エコツーリズムという整った環境のようなものをより広げていく、その方法の中にツアーなどエコツーリズムの要素があるという整理してはどうか。
- 先ほどの委員の発言部分について、本来は「エコツーリズムの実現」、「エコツアーの実施」が自然であると考え。一方で、エコツーリズムはお客様に対してのアプローチありきで、そのためにルールがあるという現在の記載の流れは、地域としてはやりやすい。
⇒（環境省）分かりやすく伝えるために参考資料や解説となる補足資料を作成し、ウェブサイトに掲載することなどを検討する。
- 最終的には事務局にお任せする。エコツーリズムの深い意味を理解せずに、自然の中で体験ツアーをやるだけでエコツーリズムをやっているとされてしまうことを懸念した。
⇒（環境省）エコツーリズム推進法でも「エコツーリズムの実施」という言葉を使っており、さらにもう少し広い概念の場合は「エコツーリズムの推進」としている。エコツーリズムを少し広めに捉えた言葉の使い方と、ツアーのような少し狭めた使い方があり、法律上は明確な区別があるが、少し分かりにくくなっているため、マニュアルなども含めて整備したい。
⇒（座長）言葉づかいについては座長預かりとし、事務局と検討させていただく。

（2）その他

■今後のエコツーリズム推進について

- 人材育成が簡素化されることにより、地域の正しい文化が旅行者に伝わらなくなり、また、そのことを地域側も指摘してくるようになってきている。それが理由で、今後、地域側が旅行者に来てほしくないと思うのではないかと懸念している。エコツーリズムの推進は4省庁で取り組んでいるので、単純に事業を増やすのではなく、横連携していただきたい。
- 地域の声をきちんと聴く機会を設けなければならないと常々思っている。エコツーリズムやアドベンチャー旅行など、関連するものが増えてきているため、横並びになりながら地域の観光をどうしていくか共有できる機会があるとよい。
また、パブコメの意見でもこの先の方策に関して提案されている。地域づくりの筋道を示すアクションプランを示してあげることで、地域も次のステップに踏み出せるの

ではないか。

- 日本において観光旅行者が訪れる地域は平準化していない。人が多い場所と閑散としている場所がある。そこへエコツーリズムの役割がある。

文化に関してはたくさん海外からのお客様が来ていることに比べて、野生動物や自然保護を意識したエコツーリズムは、旅行者にあまり広がっていないと感じる。日本で自然保護に取り組む人はたくさんおり、欧米豪の旅行者は関心が高いので、そこにエコツーリズムとして光が当たると良いのではないか。

- エコツーリズム推進基本方針を一般の人はなかなか読まないのではないかと考えたとき、次のステップとしては、どのように分かりやすく伝えていくかが課題である。現場で地域の方と話すと、エコツーリズムを必要以上に難しく捉えられていることにより普及につながっていないと感じる。また、エコツーリズムの現場では、ガイドだけでなくホテルやカフェで働く人がエコツアーをされており、エコツーリズムのミッションに合う活動をされている。そのような方に向けて、エコツーリズムを伝える資料を作ることが普及につながる。

インバウンドについては、特殊な自然環境ではない里地里山や田んぼ等にも興味を持っており、インバウンドの旅行会社はよりオーセンティックな体験を求めて、今後は一層里地里山に旅行者が来るだろう。それをどのようにマネジメントするかが次の課題となる。良いモデルをたくさん作っていかなければならない。

- 参考資料4の左側に「民間企業等との連携強化」とあり、進めていただきたい。企業は毎年2桁台の伸びを示すインバウンドをビジネスチャンスと捉えており、今後は国内の企業に加えて海外の企業ももっと参画してくることが想定される。その際に、エコツーリズムが示す方針を理解いただき、一緒にエコツーリズムが産業になるような動きを作っていく必要がある。

「他の施策との連携強化」の項目等については、各省庁の取組が重複せず、しかしながら階層的に積みあがる形になると相乗効果が生まれる。

「オーバーツーリズム未然防止のためのエコツーリズム推進法の活用」の項目については、日本全体をディスティネーションと見た際の活用方法と、それぞれの地域に対しての視点で活用方法が異なる。現在発生している局所的な旅行者の集中に対して、エコツーリズム推進法に則り、旅行先としてさまざまな魅力を体験、滞在が可能となる地域が育つことで、そのような旅を目的とする新しい旅行需要をつくり出すことに資する活動と考える。その結果として、国内外からのお客さまが行ってみたいと思う日本国内の旅行目的地が増えることで、旅行者集中地域以外への訪問者が増加し、スポット的な集中が相対的に薄まり、旅行や観光の地域貢献が地域に広がっていくことに活用できる。また、ガイドラインとして使うことで、質の高い、住民側も満足がいく、キャパシティーも見据えた形での提案ができるのではないか。

インバウンド対応の強化については、英語教育等で普通に外国の方と話せるように

なることも必要。

- 見直し案はだいぶ改善されブラッシュアップされた。エコツーリズム推進法の制定時から時代が大きく変わったが、それが反映されており、ぜひ読んでもらいたいものとなった。地域でこれから頑張る人たちへ、この基本方針は一定レベルの光を与えるのではないか。これをウェブサイトに掲載するだけではアクセスされるのは難しいため、民間のエコツーリズムに携わる人間の努力が必要であり、携わったからには真剣に届けていきたい。

人口減少地域で、子どもたちの学びの場でエコツーリズムを推進していくことは極めて大きくポジティブな意味を持つ。最近の学校は忙しいが、エコツーリズムは、上辺だけの環境教育ではなく、地域で学ぶ上での軸になりえるものだとすることを教育に携わる方に広く知っていただきたい。地域振興、エコツーリズム振興をする人が、大人の議論を進めるのではなく、そのプロセスに子ども達を負荷なくワクワクできる形で巻き込むことができるかが我々の仕事だろう。

ここ数年、企業からの引き合いが多くなっており、企業研修やリフレッシュ、サステナビリティ推進のためなど、様々な文脈で地域に足を運んでくれている。企業は地域の自然や文化、歴史に触れることを望んでいる。この文脈に戦略的に取り組むのもやりがいがありそうだと感じる。

- 観光庁が掲げる『サステナブルツーリズム』が目指すべき「上位概念・ビジョン」であり、JSTS-D がその健全性を測る「診断ツール」だとすれば、エコツーリズムは、自然に立脚した観光地域を安全に駆動させるための「OS（基本ソフト）」と考えてもいい。この OS がインストールされていない地域に、強力な集客アプリを稼働させれば、乱開発やオーバーツーリズムといった不可逆的な問題を引き起こす。これは既に世界各地で起きている現実でもある。

私は全国の観光行政を見てきて、この「OS の重要性」に対する理解度に大きなギャップを感じている。現場のガイド育成も重要だが、地域のルールづくりを担う行政担当者自身が正しい OS を理解・導入しなければ、取り返しのつかない事態になる。これは環境省だけの管轄に留まる問題ではない。私自身も今後の活動を通じ、このエコツーリズムという OS の正しい実装のあり方を、地域へ強力に啓発していきたい。

- （観光庁）

本当の文化を伝えることが重要だということはそのとおり。観光庁としても、感動が伝わるような体験を提供し、その結果として高付加価値になるような観光を推進している。本当の感動、すなわち本物を知ってもらうことをうまく言語化できるようなガイド育成が必要であり、エコツーリズムの中でも花開いていくようにすることが大事である。

旅行者の平準化や集中を薄めていくことは大きな課題である。特に外国から来られ

る方は、大都市圏に宿泊される方が多いので、いかに分散するかが観光政策においても非常に大きな課題である。分散という意味において、エコツーリズムやエコツアーは非常に親和性が高いため、幅広い観光を我が国全体に展開させていくことはとても大事である。関係省庁の連携が大事であるとのことご意見もあったが、よく頭に留めながら観光庁として取り組みたい。

○（文部科学省）

学校での取組としてどのような連携ができるかということも含め、色々ご示唆いただいたので、引き続き協力・連携できることを考えさせていただきたい。

○（農林水産省）

農泊、グリーンツーリズムとしてどのようにエコツーリズムに関わることができるかを考えながら参加していた。農山漁村の地域資源、自然環境だけではなく、歴史や文化、そこに暮らす人々の交流や暮らしを活用するという点ではエコツーリズムに貢献できている部分もある。一方で、農林水産省としては、やはり農山漁村の振興や、その住民がどうやって暮らし続けられるかということも重大なテーマである。ビジネスと自然環境の保全はおそらく表裏一体で、いかに外から人が来て、その地域にまた来たくなるか、その人と交流するのが楽しくなるかといったところが、結局は一次産業者の稼ぎにつながっていく。観光庁、環境省と連携しながら、そういった取組を進めていきたい。

○（環境省）

エコツーリズムに関して、一部の人が分かればよいというものではないということが、皆様の共通した意見だと感じた。次世代や、企業、自然保護などの分野なども含めて、全ての方面へ伝えていくことが重要である。様々な相手への伝えることについては、関係省庁とのつながりを活用し取り組んでいきたい。

○エコツーリズムの政策が長く続いている理由は、一つは考え方と理念がしっかりしており、それが共有され、あるいは誰もそれを否定できないということに尽きるのではないか。エコツーリズムとは、「自然環境や歴史文化を対象として体験し、学ぶとともに、それらの保全に責任を持つ観光のあり方」と非常にシンプルに表現されている。これを実現するためにガイドンス、ルールがある、ということがうまく共有されたのだろう。

もう一つは、地域主体、地元主体であり、究極のボトムアップ型の法律が制定されたということ。地元の方々が自分たちのことは自分たちでやっていくという責任ある取組をされてきて、それが横に広がっていった。

この二つの考え方、理念と、それに取り組む人たちが緩やかに広く長くつながったということが、エコツーリズムの取組を陰ながら支える力になったのではないか。

こうした取組がおそらくギアチェンジの段階に来ていて、今後は次の段階に進んでいくのだろう。

○エコツーリズムは 1960-70 年代に、昨今、「オーバーツーリズム」と言っているような観光に由来する課題が世界中で生じたことから生まれた概念で、ICUN（国際自然保護連合）などを通して世界中に普及し、取り組まれている。どの国に行ってもエコツーリズムという言葉は使われているが、日本ほどエコツーリズムの議論をし、法律を作り、先へ進もうとしている国は無い。協働し課題を共有しながら取組を進めていることに自信を持ち、このような観光を学びたいならば日本においでよと言いたい。

(了)